



自立した挑戦する学習者に！

校長 五十嵐 俊子

1月21日から26日まで、スウェーデンとイギリス・ロンドン郊外にある公立の学校の視察に行き、教育関係者と懇談してきました。この2校は、ICTを積極的に活用しているイノベーティブな学校で、校長先生と学部長の先生は、9月に他国の方々と一緒に本校を訪問されました。スウェーデンの学校の校長室には、2年生がプレゼントした折り鶴ががいねいに飾られてあり、うれしく思いました。

両校の子供たちは数年前から一人1台のノートPCを所有しています(スウェーデンの学校は学校と家庭が半々で負担、ロンドンの学校は基本は家庭負担で学校でのレンタルもあります)。日本の教科書に当たる教材等はすべてデジタル化されているので、子供たちはバックやリックサックにPCを入れて通学し、クラウドのアプリケーションを使って、授業中はもちろん、家でも授業の続きや宿題を行っています。先生たちも日々、ICT支援員と一緒にICT活用のスキルを高めながら、学びの変革について研究しているとのことでした。

プログラミング教育については、日本ではまだ始まったばかりですが、海外ではすでに進んでいることを実感しました。イギリスでは、教科「コンピューティング」の中で、小学校1年生から学んでいます。スウェーデンでは、プログラミングの教科はないものの、テクノロジーや算数の中に組み込まれて問題解決のツールとして学んでいます。また、興味深かったのは、スウェーデンの柔軟なカリキュラムでした。日本の学習指導要領のように各学年で学ぶ内容が細かく規定されておらず、3年ごとに区切られた中でおおまかに決まっている程度だそうです。ですから、先生が教壇に立ってみんなが一斉に同じことをするという学習の形ではなく、グループで勉強したり、個人で自習をしたりするという学習方法が多く見られました。「まちごエンジョイラーニング」のように、子供主体のプロジェクト型の学習もゆったりと展開されていました。

両校を視察して感じたことは、子供たちが自立しているということです。校長先生は、「自分でしっかり判断できる子、自分の成長を自分でコントロールできる子、失敗を恐れずに挑戦できる子に育てたい」と話されていました。わからないことや困ったことは自分で言いに来るのが当然と話され、自己責任もはっきりしています。どちらかという日本は手厚すぎて自立心が育ちにくい面があるのかもしれませんが。今回、海外の学校を訪問して、本校の教育に生かせるところはさっそく生かしていきたいと考えています。笑顔で挨拶できる町五小のよさを子供たちの誇りとして自信をもたせ、自立した挑戦する学習者に育てたいと思います。



ミルクちゃんに祈りを込めて



先月23日夜、ウサギのミルクちゃん(10歳)が心不全で亡くなりました。約1年間、職員室で過ごし、ここ数か間は寝たきり状態でしたが、プレゼントされたタオルや毛布に包まれ、差し入れをおいしそうに食べて、町五小の温かな愛の中で過ごしていました。亡くなった翌日は、クラスごとに、花で囲まれたミルクちゃんの安らかな姿と最後のお別れの対面を行いました。町五小の子供たちに、限りある命の愛おしさを教えてくれたミルクちゃんの冥福を祈ると同時に、心を寄せてくださった保護者、地域のみなさまに感謝申し上げます。ここに、飼育委員会6年生の児童が書いたミルクちゃんへの追悼の手紙の一部を紹介します。

「はじめてあなたの姿を見た私は、正直悲しかったです。足元は無残にも脱毛し、とても弱っているように見えました。こんな無残な姿を見たのは初めてで、手先が器用でない私にはお世話は無理だと思ってしまいました。それでもお世話をしないと弱りきってしまうという思いで、私は愛を注いでお世話を続けました。体は弱っていても、私があるにんじんの皮を一枚一枚口に運んでくれたことがとてもうれしかったです。生き物にとって食べることは重要で、食べられなくなることが心配だったからです。ミルクは、くるっとした目で私を見てくれました。その時私は、ウサギだって、人の気持ちやしぐさが分かっているんだなと思いました。生き物の力はすごいです。責任感のない私がお世話を続けられたのもミルクのおかげです。ミルクはつらかったと思いますが、毎日毎日がんばって、一生けんめいに生きてくれました。もっとみんなの笑顔を見たかったよね。最後にさわったミルクの体はとても冷たくて、生き物の温かな体温はもうありませんでした。とても悲しいです。もう一度ミルクを抱きしめてあげたいです。ミルクとの思い出は私の宝物です。短かったけれど本当にありがとう。命と生き物について考えさせてくれてありがとう。ミルク、大好きだよ。」

